

祭・年中行事を通じた子どもの 地域参加と社会性発達の関連

— 児童の主体的参加につながる博多部の祭・年中行事の探索 —

久木山 健 一

問題と目的

繁多(1991)は社会化のエージェントについて以下の指摘をしている。まず、社会化のエージェントとなり得る存在として、母親、父親、きょうだい、祖父母、親戚の人びと、教師、保育士など、友だち、近隣の人びとなどを挙げている。そして、核家族化の進行により、きょうだい、祖父母、親戚の人びととの接触が減少したため、両親や教師以外の社会化のエージェントとして可能性が残っているものとして近隣の人びとを挙げている。

近隣の人びとは、両親や教師との接触のみでは体験できないさまざまな経験を子どもに提供することができる長所が存在する。家庭内での「親-子」関係、学校内での「教師-児童」関係というように、両親および教師との関係性は場所および役割の固定化がなされやすい。しかし近隣の人びととの関係は、地域という家庭や学校より拡がりのある場において、「地域の人びと-子ども」という役割的にもある程度の自由度を持つ関係性が可能になると考えられる。そしてその中での体験によって、家庭や学校では得られない多様な社会化が可能になると考えられる。

また、地域での交流には、「親-教師-近隣の人びと」という属性の異なる大人とのさまざまな関係以外に、「きょうだい-学校の仲間関係-地域での仲間関係」という家庭や学校という範囲外での子ども同士の新たな関係性を生むことができ、家庭や学校とは異なる子ども同士の関係の中で、家庭や学校では体験できない通常とは違う役割などを体験することによる社会化も期待できる。

学校での仲間関係においても、クラス替えなどでの仲間関係の変化はみられるが、学校や学級内で果たす役割は学力や運動能力、対人関係能力、身体魅力などの比較的安定した要因に影響を受けて決定されることが多い。そのため、学校内での役割は一度固定化されるとそのまま維持されることも多いと考えられる。

学校内での役割以外の役割体験ができる場として、塾やスポーツクラブなどの習い

事も考えられる。しかし、塾においての役割の決定には学校と同様に学力の影響が大きく、スポーツクラブも同様に運動能力の影響が大きいため、学校内での仲間関係や役割関係と大きく異なる仲間関係や役割関係を体験できる可能性はそれほど大きくないとも考えられる。

一方、地域の中での近隣の人びととの関係においては、既存の学力、運動能力、対人関係能力、身体魅力などの影響の反映が少ない仲間関係や役割関係の形成も可能であると考えられる。そして新たな仲間関係や役割関係の中で、学校などでは目立ずリーダー的役割を果たせない者がリーダー的役割を体験するなどの新奇な役割を経験することを通じて、家庭や学校のみでは獲得できない社会性を獲得する可能性も存在する。

こうした行動範囲の拡大および役割の変容は、Bronfenbrenner (1979) によるマイクロシステムに留まっていた関係性がメゾシステムの中へと拡大することに相当すると考えられ、システムの変容と社会性の発達を関連づけて理解することの一助になりうるとも考えられる。

そこで本稿では、家庭や学校などでの固定化された役割を越えた新たな役割の体験を可能とする地域活動として、地域の祭・年中行事を取り上げることとする。久木山 (2018) では、遊び以外の社会性発達のエージェントとして、祭・年中行事への参加を取り上げ社会性発達との関連を探索的に検討している。その際、これまでの研究の問題点として、さまざまな祭・年中行事それぞれが持つ特徴や相違などを考慮せず、いずれの祭・年中行事においても同等に参加と社会性発達にポジティブな関連があるものとして取り扱うという限界の存在を指摘している。気軽に参加できて他の参加者との交流などが特に求められない性質の祭・年中行事への参加と、その祭・年中行事への参加と地域への参加に深い関係があり、地域や他の参加者との密接な交流が必須となる祭・年中行事への参加では祭・年中行事の中で起きる相互作用の内容が量的・質的に大きく異なる。そのため、それらへの参加に関連する社会性発達の種類や効果の表れ方についても相違がみられることが考えられる。

上記の問題意識のもと、久木山 (2018) では、祭・年中行事の代表例を取り上げ、それらの特徴や相違について、実施状況、存在価値の認知、参加状況、現在のソーシャルスキルとの関連などについて予備的かつ探索的に検討している。その結果、ソーシャルスキルとの関連をしめす祭・年中行事として、家庭外でのひなまつり、地域の花見、地域の盆関連行事への参加がみいだされており、地域との密接な結びつきが高い祭・年中行事への参加が社会性発達に有効であることが示唆されている。

福岡県福岡市博多区の博多部と呼ばれる地域では、博多祇園山笠や博多どんたくの

松囃子などの祭の実施を通じて、流と呼ばれる博多祇園山笠の奉納の単位をもとにした地域社会や、それぞれの流を構成する旧町を元にした構成町単位での地域社会が存在し、大都市の市街地にありながら密接なつながりを有する地域社会も現存している。しかし、久木山（2018）の検討で社会性発達との関連が示唆されたものは、博多祇園山笠や博多どんたくへの参加ではなく、博多部で夏を中心に行われる千灯明などの夏祭や地域の花見などの、流単位ではなく構成町単位で行われることが多い祭・年中行事への参加のみであった。そうした様相を示した理由については、博多祇園山笠や博多どんたく自体は、流や構成町の成員である博多部の定住者以外でも参加可能であるのに対し、夏祭や地域の花見などの参加者は地域の定住者にほぼ限定されるため、地域の祭・年中行事への参加と社会性の発達に有意な関連が示されたという説は現時点では可能性に過ぎない。しかし、これまで注目を受けることが多かった博多祇園山笠や博多どんたくだけではなく、博多部の夏祭などについてその詳細や社会性発達との関連を検討する意義の存在が示唆されたとはいえよう。

そこで本稿では、博多部で行われる夏祭についてその詳細を検討し、社会性発達との関連において、家庭や学校とは異なる仲間集団への所属や役割体験が可能であるのかについて探索的に検討することを目的とする。

方法

博多部において7月、8月に行われる子どもが参加する夏祭について、現在でも行われているものについて『博多カレンダー2018』、『新修福岡市史』を中心に収集した上で、執筆者が2016年から2018年の間に見学した体験などにも基づき整理する。また、それらの夏祭の過去の様相について、明治時代のものを『博多山笠記録』の「博多津中年令階梯制」をもとに収集し、過去と現在の夏祭の連続性および相違について整理する。また、博多部の夏祭の同様の基礎を持つと考えられる京都の地蔵盆について『京都地蔵盆の歴史』の記述をもとに比較する。

結果と考察

1. 過去の夏祭の一覧

博多祇園山笠振興会（1975）による『博多山笠記録』に収められている「博多津中年令階梯制」は、博多部を中心とした明治13年から大正2年までの間に生まれた約

200名以上に昭和40年ころまでに行った聞き取り調査をもとに記載されている。そのため、子ども組に関する記述のほとんどは明治時代の博多部の子どもの活動を反映していると考えられる。以下、夏祭りに該当する千灯明について引用しつつ、子どもの役割などについて注目していく。

千灯明。 (太い青竹を、千灯明をする場所に合わせて適當の長さに切り、二つに割る。その中に川砂を入れて、その上に帆立貝の殻をならべ、それに種油を注いで、灯芯を置き点火する式しものが一般的なやり方であった。) 千灯明の唄をうたった。櫛田神社にあげた。ひとえの着物を着ていた。献灯箱・組立台・提灯があった。せんぺいやお茶があった。麴屋番や上対馬小路とよく喧嘩した (博多五町)。濡衣さまの千灯明には喧嘩した (官内町)。昭和のはじめごろまで、上芥屋町の竹石の家に勝軍地藏がって、そこで型どおりやっていた (上芥屋町)。七月二十五日に寄って、見立細工をやりよった。それは夕方でない人には見せなかった。朝の九時ごろから祭りがあり、年寄は直会、子供は千灯明の準備で忙しかった。若手が用がないので、思い立って、山の買物帳を生かして、晩の会食の用意をしてくれた (組場町)。博多八十八ヶ所第一の札所、光照寿院のお地藏様で、夏越のときに千灯明をやった (中・下対馬小路)。七月二十日の恵比須神社の夏祭に、鯛の絵のついた提灯に灯をつけたりした。千灯明は五、六才から十一、二才まで。ヤカタを作り接待所を設けて、お茶や「せんぺい」をお客に出した (下鱈町)。横町の六尺石のあるお地藏さままでやった。向い側で年寄や若手と打あげをした (上洲崎町)。琴平稲荷^{ことだま}で七月二十六日夏祭りのとき、五、六才から十二、三才までやった。火は「たいまつ」で点けた (古門戸町)。七月二十八日子供だけの責任でやった。「とい」帆立貝、灯芯の「しん」「からし油」は町内から二升貰った。まんじゅう、菓子は各戸から寄附、二十八日朝、いまの日活ホテルあたりで、貝洗いをし、帰って仕掛けをした。「とい」に砂を入れて貝を置く。二十九日には始末をし、御神殿の中に納めた (蔵所町)。竹の代わりに貫板の上に砂をおいて貝がらを置いてやった。下照姫神社で、七月十三日にやった。廻廊から玉囀には提灯もとぼした。「せんとうみょうせんとうみょうともして消すがせんとうみょう」といって消す男の子があり、「みやしてつくるがせんとうみょう」というのは女の子が点火した (瓦町)。七月二十四日朝、みなでお宮の掃除をし、獅子なども清める。山の提灯をずっとさげ、千灯明をした。男の子は提灯のローソクの芯切り、女の子は千灯明の油さしをした。二十四、五日の二晩やった。二間物ぐらいの青竹を割って砂をおき、貝がらをおいた。砂は今の川がきれいであったので、そこから採ってきた (川端町・下川端町)。享保の飢人地藏 (旧西門川原) が今もある。そこでやった。

去年（昭和三十八年）ごろから灯芯がない。聖福寺の大和尚が、山内のお坊さんを連れて法要に来た（古小路・西門・上魚町）。正月三日、七月十五、二十日恵比須様でやる。いまでも櫛田神社から来て祭る。砂は浜の砂を用う（大浜二丁目）。櫛田神社内のゆうが様の向いの地蔵堂でやった（大浜一丁目）。七月二十一日阿弥陀さまでやった（大浜三丁目）。七月二十日、六、七才、子供頭は三、四年生位、お灯明代は各戸から貰い、お賽銭でまかなった。貝洗いは紡績（鐘ヶ淵紡績工場）のところでやった（古溪町）。豊国神社の蔵に明治十九年の子供中の帳面がある。車で向島の大堰の下に貝洗いにゆき、砂を採ってきた（奈良屋番）。北辰妙見さま叶院で七月六日の晩にやった（竹若町）。上は楊ヶ池の若八幡様、下は大神宮（今は櫛田神社内）でやった（西町）。旧六月二十五日、金比羅さまでやった。朝住吉のところから砂をとってきた（中土居・上新川端）。旧六月二十五日、お薬師さまでやった（今熊町）。大薬罐に甘茶をわかして接待した（西方寺前）。諏訪神社であった（中土居）。聖福寺で八月四日にやった。六年生位が子供頭で、一年生位から集った（金屋小路）。七月二十四日にやった（普賢堂）。一行寺の石地蔵さまのところ、七月二十四日にやった。重箱を持って各戸にお賽銭を乞うて歩いた。残った金の処分は子供頭がした（官内町）。夏祭り、人形をかざり、地蔵様に千灯明をあげた（中市小路）。八月十七日の打上げには、「ぼうぶらぜんざい」を炊いた（寺中）。八月二十三、四日（上厨子）。七月二十三日、四日（上普賢堂）。八月三十日（大乘寺前）。八月九、十日（赤間町）。対馬小路下の黒崎屋のお稲荷さまでやった（蔵所・石城）。大神宮さまで（西町）。楊ヶ池で（上西町）。七月二十八日にやった（妙楽寺前）。

太字は著者による。

蔵所町において「子供だけの責任でやった。」と明示されている他にも、「年寄は直会、子供は千灯明の準備で忙しかった。若手が用が無い（組場町）」、「重箱を持って各戸にお賽銭を乞うて歩いた。残った金の処分は子供頭がした（官内町）」などの記述がみられ、当時の千灯明が子どもが主体となる行事であったことが確認できる。千灯明を行う子どもの集団である子ども組の年齢幅は各構成町によって異なるが、おおよそ小学校一年から六年が中心の集団であり、小学生六年生もしくは高学年の児童が「子供頭」というリーダーとし子ども組を率いることも共通していたと考えられる。

子ども組が行う活動として、「集金」「お宮の清掃、接待所の制作」「接待」「お金の管理など」が挙げられている。これらの活動は学力や運動能力以外の対人関係能力や組織運営能力金銭管理能力などが必要なものであるため、学力や運動能力などで構築されやすい学校内での人間関係や役割関係以外の人間関係や役割関係などの体験が出

来た可能性が存在する。

2. 現代の博多部の夏祭りの概要と子どもの存在

『博多カレンダー2018』に挙げられた夏祭りに関して、日程、祭りを行う構成町名もしくは主催団体、祭の基礎となる寺社などの名称、祭自体の名称、祭の開放範囲についてまとめたものをTableに挙げる。祭の範囲で、「町内」は基本的に構成町の会員のみで行われると推測されたもの、「町内外」は構成町以外の地域会員に対しても開かれていると推測されたもの、「開放」はより広く地域外の会員に対しても開かれていると推測されたものとなっている。

Table 2018年の博多部の夏祭とその開放範囲

日程	町名	主祭	祭の名称	祭の範囲
7月20日	奈良屋町	豊国神社	夏祭	…
7月20日	下呉服町	萬四郎神社	夏祭	…
7月21日	大博町	沖濱恵比須神社	夏祭	…
7月23日～7月24日		下豎地藏尊	夏祭	町内外
7月23日～7月24日	上金屋町	顎無し地藏	千灯明	町内
7月24日	蓮池町	入定寺	夏祭	町内
7月24日	普賢堂	普賢さま	千灯明	町内外
7月24日 7月25日	綱場町	綱敷天満宮	夏祭	町内外
7月28日	桶屋町	不動明王	千灯明	…
8月4日	御供所町		千灯明	町内
8月4日		博多小学校	夏まつり	開放
8月5日		「博多町家」ふるさと館	夏まつり	開放
8月6日	冷泉町	寶照院	夏祭 七夕祭	町内外
8月16日		海元寺	閻魔祭	町内外
8月16日	千代町	濡衣塚地藏尊	夏祭	町内
8月16日		東長寺	大施餓鬼会	…
8月17日	冷泉町	寿福院子安観音	夏祭	町内
8月21日	出来町	大楠様	千灯明	町内外
8月21日～8月22日		高砂連	大施餓鬼会	開放
8月23日～8月24日	川端町	飢人地藏尊	夏大祭	開放
8月23日～8月24日	千代町	石堂地藏尊		…
8月23日～8月24日	上豎町	正定寺	地藏盆	…
8月24日～8月26日	大浜流		灌頂	開放
8月24日～8月25日	下川端町	鏡天満宮	夏祭	開放
8月24日	西門町中小路	飢人地藏尊	地藏祭	町内
8月24日	奈良屋町	観音寺	地藏盆	町内
8月30日	上川端町	勅願石碑	石碑前祭	…

…は未確認

福岡市（2012）による『新修福岡市史 民俗編一 春夏秋冬・起居往来』第一部第二章年中行事と季節の興趣第一節博多の四季（四）夏および（五）盆には博多部の夏祭りが多く紹介されており、2010年前後の博多部の祭・年中行事の状況を知ることが出来る。以下、収録されている夏祭りについて、主に子どもに関わる記載を執筆者の判断に基づき抜粋することとする。

萬四郎様 七月二十日。旧上浜口町の萬四郎神社の夏祭り。（子どもに関する記載なし）

下豎町の地蔵尊祭り 七月二十三日、二十四日、旧下豎町地蔵菩薩の祭り。町内の子供たちがヨーヨー釣りなどで楽しむ。

普賢堂町の千灯明 七月二十四日、叶院での法要の後、住職が子供たちを引き連れ、法螺貝を吹き、読経をしながら町境まで行き「辻祈禱」をする。叶院境内と通りには、サラダ油を満たした土器を並べ、子供たちや参拝者が「千灯明、千灯明、消やして点すは、千灯明」と唄いながら、赤松の燃えさしで火を点していく。以前は、貝殻に菜種油を入れたものを使っていた。火が点ると、町内の若手が消し、また子供たちが点ける。かつてこの祭りは子供の一番の楽しみであったという。

蓮池町の地蔵盆 七月二十四日は、旧蓮池町の入定寺境内にある地蔵菩薩に蠟燭を点して千灯明をする。法要の後、町内の子供たちが火を点して、ヨーヨー釣りなどで楽しみ、大人たちは堂内で直会をする。かつては、子供たちそれぞれが持った蠟燭の火を互いに消し合って遊んだものだという。

萱堂町の地蔵祭り 七月二十四日、旧萱堂町の魚腹地蔵の地蔵盆。ここでは女兒が点す灯明と男児が点す灯明にわかれていて、互いに競って消し合ってはまた点すという遊びが楽しかったものだという。

綱敷天満宮の夏祭り 七月二十四日、二十五日、旧綱場町綱敷天満宮。（子どもに関する記載なし）

桶屋町の千灯明 七月二十八日、旧上桶屋町の不動明王の祭り。日暮れから子供たちが本堂の不動様の灯明を小さな蠟燭にとり、境内に並んだ蠟燭に移していく。火が点ると、近くの大人たちが団扇で消すことを繰り返す。

御供所町・奥堂町の千灯明 戦前まで、旧御供所町内外の各所で千灯明が行われていた。これは子供の行事で、自ら各戸をまわり費用を集め、貝殻に入れた「ジミ」（灯心）に火を点して飢饉でなくなった人々を供養した。祭りが終わると貝殻などの道具を整理し、翌年の当番に渡すのが大事な仕事で、参拝にきた大人は、道具がきちんとしていたのを見て子供たちを誉めるものだったという。

辻祈禱 八月六日、旧竹若町の寶照院で行われる。修験者姿の住職らの後を小さな提

灯を手にした子供たちがついて行く。

海元寺の閻魔様 八月十六日は旧蓮池町の海元寺かいげん せんまで閻魔様の開帳（子どもに関する記載なし）

飢人地蔵祭り 八月二十三日、二十四日、享保の飢饉の犠牲者を弔う飢人うえにん地蔵の祭りがある。かつては子供たちが「とんがりおにぎり」を供え、鉦を鳴らして参拝していた。
大浜流灌頂 おおはま大浜では二十四日から二十六日まで流灌頂ながれかんじょうがある。（子どもに関する記載なし）

3. 過去と現在の祭の性質の違い

博多部の夏祭に関しては、開催日や開催の構成町などに関しては過去と現在ではほぼ変わりがないと考えられる。また、祭の中で行われている行事の内容自体もそれほど変化が無いと推測された。しかし、大きく変わった要因として、祭りの中での子どもの役割を指摘することが出来る。

過去の夏祭においては、子どもは祭の進行や予算管理などを任されており、実際には多くの大人の手助けが介在したと考えられるが「夏祭の主催」という役割を子どもが担っていたと考えられる。また、子どもの集団の中でも、最年長の者がリーダーとして機能していた記述もみられ、最年長の者のリーダーシップのもと、子ども集団は祭りを維持し大人を接待する機能を果たしていたと考えられる。

しかし、現在の夏祭を複数見学した経験からは、普賢さまの辻祈禱において祈禱をされる修験道の人に子どもがついて歩き、団扇であおぎ風を送る奉仕活動が確認されなどした以外には子どもが祭りの進行に直接関与する活動はほぼ確認できなかった。この観察は、夏祭の準備段階などからの参与をともなう観察ではなく、祭の開始後に観客として外部から観察したものをもとの類推であるため、実際に行われていた子どもの主体的な活動を見落としていた可能性も高く、今後の準備段階からの取材や観察が不可欠であることには間違いがない。しかし、観察ができていない子どもの主体的な活動が存在するにしても、全体的に、「子どもによる主催性を有する主体的な活動」が失われていることも否定できないであろう。そのため、祭りの準備、運営などは大人の手により、子どもは祭の楽しさを享受する側に立っていたと考えられる。

4. 京都の地蔵盆との共通性

博多部の夏祭は京都の地蔵盆とほぼ同様の内容で行われるが、京都で起きている内

容の変化は博多部の夏祭のものとはほぼ同様であると考えられる。以下、村上（2017）による京都の地蔵盆の概要について引用し、その内容および変化の共通性について概観する。

以下、『京都地蔵盆の歴史』の「序章 地蔵盆の風景」より子どもの活動に関する箇所を抜粋して引用する。

- ・聞こえてきたのは子どもたちの歓声と大人たちの笑い声だった。
- ・あんどんやちょうちん提灯で照らされたテントの周辺で、ゲームなどの遊びに興じる子どもたちや、その姿を見まもりながら談笑する大人たちの姿が見えてくる。
- ・祭壇やお地蔵様の周囲には、奉納された提灯がいくつも吊され、道路には子どもたちが描いた絵で飾られたかわいらしい行灯がかけられている。
- ・お地蔵様のまわりでは、あらかじめ決められたプログラムにそってスイカ割りや輪投げ、水遊びなどが実施される。
- ・子どもたちにとって、一番の楽しみは福引きである。クジを引いて、期待していたものが当たるか、みんなドキドキしながら結果を見まもっていた。
- ・**当番にあたっている大人たちは大変そうだが**、近所の人が集まってあちらこちらでおしゃべりの輪ができる。
- ・僧侶に来てもらって、読経などの宗教的な行事を続けているところもあるが、現在では子どものための行事としての色合いも強くなっており、福引き、金魚すくい、輪投げといったゲームやおやつ配りなどが主になっているようにみえるところもある。地域の行事としては、宗教色が強すぎるとさまざまな事情で参加しにくい家庭が出てくるので、読経や数珠練りなどの宗教色をなくして「夏祭り」などの地域行事として実施しているところもあるようだ。
- ・最近では少子高齢化によって参加する子どもの数が減少しているところや、**主催する大人の負担軽減のために開催時間を短縮しているところ**、存続自体が危ぶまれているところがあることも耳にした。

太字は筆者による。

村上（2017）では先に抜粋した地蔵盆の風景の中で、“「地蔵盆」とは、京都府をはじめ、滋賀県、奈良県、大阪府、兵庫県、福井県など、主に京都周辺の府県で盛んに行われている年中行事なのだが（文化庁、1969）、それ以外の地域ではあまり馴染みがないかもしれない”と説明している。筆者は歴史の専門家ではないため、京都の

地蔵盆と博多部の夏祭りの歴史的連続性などの確認は今後の課題としたいが、博多部夏祭りとは祭の内容自体には高い類似性があるといってもよいであろう。また、村上(2017)によるとかつては子どもの流行によって発生したとされる京都の地蔵盆においても、現在は大人が主催し子どもはそれに客として参加するようになった変化があることも、引用部に執筆者が施した太字部分を読むと推測することができる。

京都と博多部で同じように子ども主役かつ子ども主導で行われていた夏の祭が、現在では主役は今でも子どもであるが、その準備や進行などは大人主導となったという共通の変化を示していることは間違いがない。こうした変化は、子どもの学業や習い事などへの従事の重視と言う価値観への変化や、そうした価値観のもとでの子どもの自由時間の減少などによって説明が可能であろう。そのため、家庭や学校では体験できない仲間関係や役割関係の場として博多部の夏祭りを検討した結果として、学力や運動能力でその地位が決定しやすい学校の人間関係から離れる機会の減少を再認識させただけであるのは残念な状況であるが、祭や年中行事が時代の変遷やそこからの要求を受けて変化し続けるものであるのであれば、今後博多部の夏祭りの見学を続けることで再び子ども主導の活動の再建をみることもできると考えられる。事実、博多小夏まつりに関しては、博多部の商店を中心に一般の民家などにも、博多小の児童がそれぞれを手描きした祭のポスターが貼られているのを数十枚単位で確認することができた。また、灯明に絵を描くことなどを通じた子どもの参加も多くみられた。今後、このような準備段階への子どもの参加関与の増加とともに、さまざまな子ども主体の活動が増えてくるかなどの検討が重要となると考えられる。

文献

- Bronfenbrenner, U. 1979 *The Ecology of Human Development: Experiments by Nature and Design*. Cambridge, MA: Harvard University Press. (ブロンフェンブレナー、U. 磯貝芳郎、福富護 (訳) 1996 人間発達の生態学：発達心理学への挑戦 川島書店)
- 福岡市史編集委員会 2012 新修福岡市史 民俗編一 春夏秋冬・起居往来. 福岡市.
- 博多祇園山笠振興会 1975 博多山笠記録. 博多祇園山笠振興会.
- 繁多進 1991 第1章 社会性の発達を考える. 二宮克美・繁多進 1991 たくましい社会性を育てる. 有斐閣選書.
- 久木山健一 2018 祭・年中行事への参加と社会性発達の関連 一祭・年中行事のイメージ・参加状況・ソーシャルスキルの関連一. 日本心理学会第82回大会発表論文集
- 村上紀夫 2017 京都地蔵盆の歴史. 法蔵館.
- 博多カレンダー制作委員会 2017 博多カレンダー2018. 博多カレンダー委員会.